

2026 年(令和 8 年)3 月 28 日

報告者：(研究会座長)濱名均

テーマ：「世界を視る」

「世界を視る」見方・視座は実は多く存在します。そんな中で今回は「3つの視座から世界を視る」と題して日頃の研究・研鑽を報告します。

\* AI などは一切使用せずに、今までの濱名の中で構築されたもののアウトプットで行う。

\* 学術論文形式は取らずに、依拠する出典・資料などは開示せずに流れを重視した発表です。

\* 今までの渋沢栄一研究会の流れに考慮しつつも、「～から始める」研究会に比重を置く。

テーマ①

### ① 『バックスミンスター・フラーの「宇宙船地球号」の視座。アリストテレスの学問体系への挑戦』

宇宙船地球号(英文、Spaceship Earth)とは、地球を閉じた宇宙船に例えて地球の資源の有限性や資源の適切な使用について語る概念・言葉である。フラーはアメリカ合衆国の思想家であるが、何よりも同時に建築家であることが大きいと思う。

ヨーロッパが 17 世紀に近代合理主義を樹立したルネ・デカルト以来の哲学によって、世界の思想・哲学界をリードして来ている存在であるが、アメリカ合衆国はプラグマティズム(日本語の翻訳は道具主義と訳されていますが、プアーな翻訳と言えるでしょう)の思想・世界の人々です。「思想、知的な遊びは兄貴分の欧州にお任せする。我々はその思想・哲学の実行者なんだ」という気概で今日まで来ている。卑近な例を引くと、フランスのマクロン大統領と米国のトランプ大統領のフランス現地でのやり取りにそれが良く現れている。フラーは建築家という「ものづくり」の世界の人なので、書籍のタイトルにも実際に社会に適応されるべく「マニュアル」としているところに最大の特徴がある。

そうなのです。フラーは書籍(「宇宙船地球号操縦マニュアル」1963 年の出版; 文庫本では 130 ページほどです。是非ご購入を!)で、地球と人類が生き残る為には、個々の学問分野や個々の国家といった専門分化された限定的なシステムでは地球全体を襲う問題は解決されないことを論じている。地球を包括的・総合的な視点から考え理解することが重要であり、そのため教育や世界のシステムを組みなおすべきだと主張した。

1980 年代の西欧諸国に於ける消費者運動を介しての環境運動。そのうねりが 1992 年の先進国首脳会議「ブラジル・リオデジャネイロでの地球サミット」に結実した。(濱名はこの年に日本学術会議登録指定学会の実践経営学会に「サービス経済社会と経営戦略Ⅲ、環境問題とその周辺」と題して発表、論文として紀要に掲載された)、1995 年からの COP(国連気候変動枠組条約締約国会議)開催、1997 年の COP3 での京都議定書の採択、これらは今日では国連主導の SDGs となって教育現場にも現れて続いている。バックスミンスター・フラー以降の「循環型経済社会」の提唱なのである。残念なことではあるが、大人の市井で

はカッコを付けて「サーキュラーエコノミー」などとカタカナを使って「分った気持ちになっている」人達が多くいる。教育現場では与えられた SDGs に夢中に取り組むだけで、その来仕方行く末を考えることが疎外されている。これでは「真の教育」とは言えない。単なる「一部の大人が考える社会秩序の押し付け」に成り下がっている。

歴史を振り返ってみると古代ギリシヤの哲人たちの学問姿勢を振り返り、その時々々の社会や世界の問題をクリアーにしてアフトヘーベン（止揚：乗り越えること）していくという研究者・学者が多く存在している。代表者として思い浮かぶのは哲学・思想史上ではフリードリヒ・ニーチェやマルティン・ハイデガーである。ハイデガーは将にアリストテレスの学問体系を深く理解した上で、異議を唱えた哲学者であった（それが当時のフランスさらに現代の実存主義へと繋がっていく）。現代社会（20/21 世紀）では思想家で建築家のバックス・ミンスター・フラーやそれを経済学の世界に取り入れた同じくアメリカの経済学者、ケネス・E・ボールドウィング（「来るべき宇宙船地球号の経済学」1966 年に出版）と言い得る。

高校生の倫理社会の教科書では「学問の祖アリストテレス」として紹介され、受験勉強に馴らされている優秀な生徒こそが、大学生時代以降もそのレベルの理解で満足している。残念なことではあるが大学の教養学部では「教養」に限定する為に、来仕方を哲学や思想史のなかで理解を深めることは一般的には無い。また優秀さを競う学生/現在のカリキュラムでは、自分の興味の向いた学問の世界に浸るといふ冒険はしないのが一般的である。その点、専門の学部体系や社会科学系単科大学では 1 年次から取り組むので絶対的な時間的な余裕が生まれる。自分たちの学問方法（論）が、ギリシヤ以来のアリストテレス（将に学問の祖）学問体系が、専門化を押し広げて行くなかで、「全体が見えなくなっていく」というジレンマに気が付く可能性が多いと言えよう。もちろん大学の指導教官の質やレベルが問われるところでもあるが。

さてこの辺で筆を置くことにする。以上が「3つの視座から世界を視る」の一つ目でした。この項を構想している時に、15 世紀にイタリアのフィレンツェ（ローマから現代では新幹線で 1 時間ちょっと、小生もカミさんと個人旅行で 13 年前に訪れました）で、激しく花開いたルネッサンス運動を思い浮かべました。新プラトン主義（プラトンの理想主義：国家論を論じつつ為政者や軍人の「人間の徳」を説くというプラトン思想の再現）の再現運動でした。そこで我々が当研究会を通して「武士道/武士道精神」の現代への応用・適用（トヨタ自動車の会長職を歴任し経団連の会長を務めた奥田碩氏が、武士道を現代企業経営者への心得として推奨していました）に当たり、今一度西洋近代合理主義の出発点となったプラトン主義について再考しようと考えます。次々回 4 月 25 日の渋沢栄一から始める研究会のテーマに取り上げるつもりです。幸いこの辺を自己の思想形成の一部として来た今野茂雄先生に再度登壇いただく予定です（補助的に濱名も発表側に参画します）。